

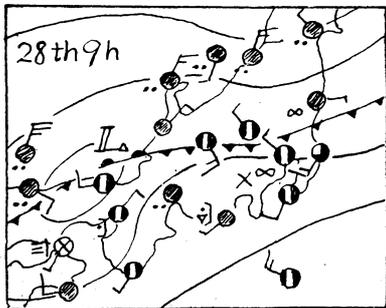
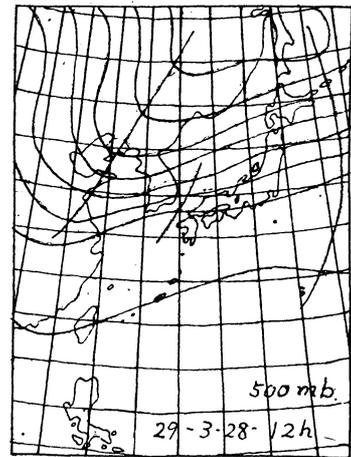
富士の吊し雲

(裏表紙の写真説明)

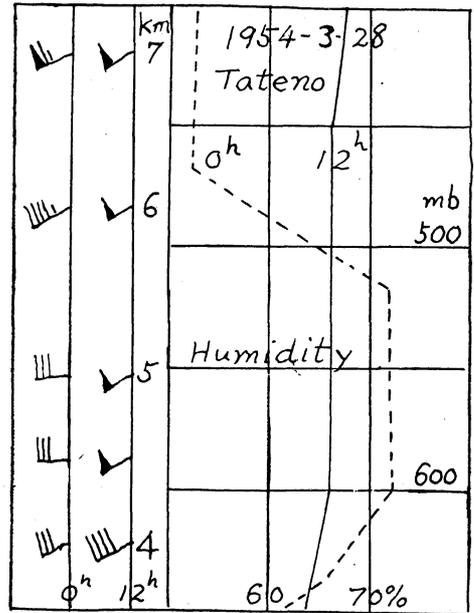
大井正一

写真1(表紙2)は昭和29年3月28日5時30分頃、渡辺正臣氏が三ツ峠頂上付近で撮影されたもので、5分後には形が乱れ上に昇り、雲の位置は山中湖の上のように思われたという。写真2(表紙3)は同日8時30分頃、長田昭典氏が富士山頂測候所より撮影されたもので、時刻が3時間違いますが、恐らく同じ所に発生していたものであろう。そういう点で興味ある資料である。

このときの気象状態を見ると、いちぢるしい上層の谷が朝鮮と九州にあり(第1図)、9時の地上天気図では若狭湾に低気圧が発生して各所が雨となって居り、寒冷前線が近づいている(第2図)。また館野の湿度は800mb以上で10%位増し、風はWSWで50m/sに強まっている(第3図)。以上によって大気が不安定な状態になっていた時に出来た雲であることがわかる。御前岬では8時から驟雨、山頂では12時から雪となっている。すなわち天候悪化の前兆となった場合である。



(上) 第1図 (下) 第2図



第3図

すなわち天候悪化の前兆となった場合である。

吊し雲は山のために不連続に強制的に波動が生じた時に発生するもので、その機構はよく知られており、[1][2]にもよく述べられている。植野隆寿氏は10年間の資料から459回の富士の吊し雲について非常にすぐれた統計的研究をされたが[3]、その結論を見ると、

(1)吊し雲は7月に最も多く、時刻では8時前後が最も多い。出現回数の極大は朝と夕方に一つずつあり、夏は冬に比し朝の極大は早く、夕の極大は遅い。(2)吊し雲出現時の船津の風はWNWが多いが、これは地形の影響であろう。(3)吊し雲の継続時間は他の茨状雲に比して長い。(4)吊し雲の出現は地上がSE~SW上層がSW~WSWの強風になるような気圧配置の時に多い。(5)吊し雲出現時は曇が多く、16時間後には雨の場合がやや多い。冬には16時間以内に、夏には8時間以内に雨になる確率は任意に選んだ時刻より16時間および8時間以内に雨になる確率より遙かに多い。この植野氏の結論の(4)及び(5)は今日の見方からすれば上層の谷前面に出現し易いということと同じになり、興味あることである。

(中央気象台)

- [1] 気象集誌 昭14, p. 109.
- [2] 同 昭18, p. 541.
- [3] 天気と気候 昭22, Vol. 4. p. 4.